空間・社会・地理思想 27 号，211-213 頁，2024 年
Space, Society and Geographical Thought

四半世紀を経たEARCAG：東アジア批判地理学の回顧と展望

――鄧永成先生を偲ぶ――

イップ　モーリス（葉（イップ）　鈞頌（クワンチュン））*・水内　俊雄 **

特集の紹介

本特集は、2024年1月26日に逝去された鄧永成（タンウィンシン）（Tang Wing-Shing）先生を偲ぶものである。『空間・社会・地理思想』は、理論、学問、地理思想の歴史と、世界の社会空間的変容との関係の紹介や解明を編集テーマの主柱としている。先生の生涯を振り返るとき、その学問的経歴と精神がひとつの東アジア批判地理学の歴史と複雑に関連しており、本誌で取り上げるにふさわしい。本特集の目的は、過去25年間の東アジア批判地理学の軌跡を考察し、その過程で先生から受け継いだ遺志を捉えることである。そうすることで、東アジア批判地理学者のコミュニティは、今後の研究と活動の道を探ることができる。

なぜ25年という時間枠を考えるのか？それは、1999年1月23日から26日にかけて、第1回東アジアオルタナティブ地理学地域会議（East Asian Regional Conference in Alternative Geography、以下EARCAGと略記）が韓国で開催されたのが、ちょうど25年前だったからである。この25年間で、EARCAGのコミュニティは大きく成長し、10回の会議が開催された（表1を参照）。本特集の編集者の一人である水内が鄧先生と初めて会ったのは、ちょうど25年前のことである（本特集の寄稿を参照）。信じられないような偶然だが、本特集のもう一人の編集者であるイップが鄧先生と初めて会ったのは、ちょうど11年前の2013年1月25日、香港浸会大学キャンパス隣接地の土地区画整理に関する香港城市計画委員会での抗議集会だった[1]。二人の編集者にとって、鄧先生との最初の出会いはその後の学問的発展に影響を与えた。水内は鄧先生との同志的つながりをもって「ブラザー」と呼び合う親密な仲となり、イップは鄧先生の教え子となった。二人は鄧先生の地域、都市、地方、そして世界への関心と、社会空間正義の実現への献身に感銘を受け、それらが彼の批判的研究の基礎となっている。そして何よりも、他の多くの東アジアの批判地理学者と同じように、二人とも鄧先生との友情を大切にしてきた。本特集では、EARCAGを核として数名の東アジア批判地理学者たちが鄧先生との過去の出会いを記録し、それによってEARCAG、ひいては東アジアの批判地理学の発展を振り返り、今後の進む道を展望している。

表1　EARCAGの開催地とテーマ一覧

回	開催年月	開催地	テーマ
1	1999/01	慶州・大邱（韓国）	Socio-Spatial Issues for East Asian Countries in the 21C
2	2001/12	香港	Alternative Geographies of Asia in the New Millennium
3	2003/07	大阪・東京（日本）	Searching for Alternative Globalism from Below
4	2006/08	台北（台湾）	Theorizing and Practicing Critical Geography in East Asia: The Dynamic Regionalism in the Global World
5	2008/12	ソウル（韓国）	Post-Globalization and East Asia
6	2012/02	セランゴール（マレーシア）	Global Change and the Re-shaping of Society and Environment in East Asia
7	2014/07	大阪・東北（日本）	The Right to Inhabit: The Asian Challenges
8	2016/12	香港	Radicalism in Theory and Practice
9	2018/12	大邱（韓国）	For Spatial Justice: Rethinking Socio-Spatial Issues from East Asian Perspectives
10	2022/12	台北（台湾）	New Geo-Politics in East Asia

備考：EARCAGジオポリティカル・エコノミー・国際ワークショップ（EARCAG-GPE Workshops）は、ソウル（2013年）、バンクーバー（2015年）、台北（2017年）、大阪（2019年）、香港（2023年）で開催された。

1　Lai, Y-K. 2013-01-25. HKBU teachers, students protest land decision. *South China Morning Post*. https://www.scmp.com/news/hong-kong/article/1136080/hkbu-teachers-students-protest-land-decision

*　ローザンヌ大学地理学・サステナビリティ研究所助手、大阪公立大学都市科学・防災研究センター客員研究員
**　大阪公立大学客員教授、大阪市立大学名誉教授

構成について

本特集の構成としては、8つの寄稿がある（表2を参照）。**香港批判地理学グループ**（HKCGG）の追悼文から始まる。HKCGGは鄧先生が香港の教え子や志を同じくする人々とともに設立した。この追悼文は、鄧先生の詳細な経歴を紹介し、香港における鄧先生が行った学術活動とコミュニティ活動の政治的側面を示している。HKCGGが示唆するように、彼の活動はそれにもかかわらず、東アジア地域と世界に対してより広い影響を及ぼしている。鄧先生の友人であり研究協力者でもある**リー・ジョアンナ**氏と**ソロモン・ベンジャミン**氏が、HKCGGのメンバーと共同でこの寄稿を執筆した。

2番目のEARCAG運営委員会からの寄稿は、過去25年間における鄧先生のEARCAGへの貢献を紹介するものである。先生はこの委員会の中心メンバーとして活躍してきた。どの会議でも、先生は学術論文を発表し、他の参加者と彼の洞察を分かち合った。国際運営委員会のメンバーは、先生との友情と貴重な思い出を語ってくれている（ただし、このうち創設期から関わっている5人のシニアメンバーの回顧録も後述するように別途掲載されている）。

鄧先生は2001年と2016年の2回、香港でEARCAG会議を開催した。3番目の寄稿では、先生と緊密に協力し、2回の会議の準備と開催に共に携わった**ウォン　キッピン（タミー）**氏、**水岡不二雄**氏（EARCAGの創設者の一人）、**リー・ジャッキー**氏、**ソロモン・ベンジャミン**氏が、当時の思い出を振り返る。その目的は、開催都市と東アジアが直面していた当時社会空間的課題への対応として、鄧先生がどのように2つの会議を組織したかを示すことである。

EARCAG国際運営委員会のシニアメンバーから4～7番目にあたる4本の寄稿が続いている。EARCAGのもう一人の創設者である**チェ・ビョンドゥ**氏は、EARCAGの設立の経緯を紹介し、鄧先生との出会いも回想されている。**水内俊雄**氏、**シュー・ジンユー**氏、**パク・ベギュン**氏から3本の寄稿は、EARCAG会議での最初の出会いの後、鄧先生との対話や議論が、彼ら自身の研究課題や理論的観点にどのような影響を与えたかを記録したものである。これらはすべて、過去25年間にわたる東アジア批判地理学の重要かつ多様な側面を反映している。

最後に、鄧先生と大阪市立大学との20年近くにわたる密接かつ継続的な関係を記念するために、本特集の最後の寄稿として、大阪市立大学都市研究プラザURPの香港オフィス設立やその後の企画にあたっての鄧先生の多大な貢献について、そして、関連する先生の出版物のリストを作成した。

すべての寄稿は英語で行われ、日本語での翻訳を加えている。また、HKCGG追悼文の繁体字中国語版も掲載している。

編集者として、短期間のうちに多くの原稿を英語から日本語に翻訳してくださった三重大学の森正人さんにお礼を申し上げる。本特集の準備と編集をサポートしてくださった大阪公立大学と香港批判地理グループのウォン　キッピン（タミー）さん、九州大学のコルナトウスキ・ヒェラルドさんに感謝する。また、香港側ではチャン　キムチン（陳剣青）さん、日本側では大阪大の堤研二さん、金沢大の中島弘二

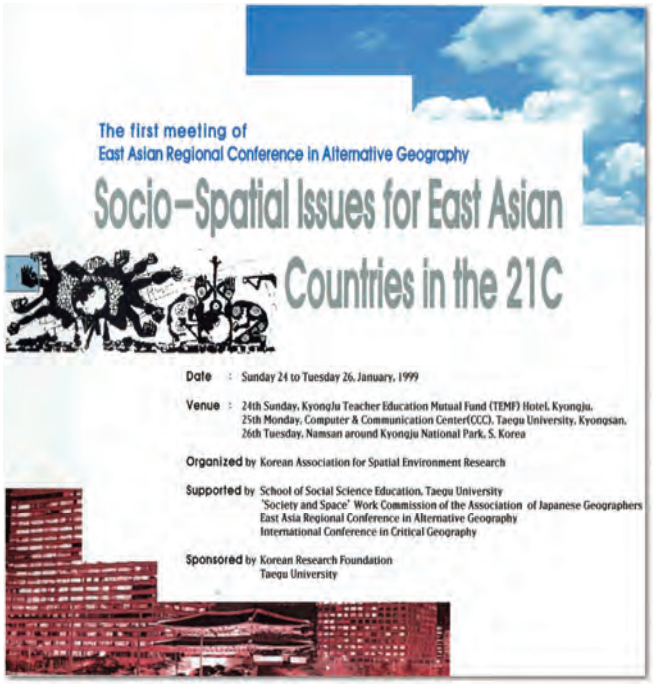
表2　本特集の構成

1	香港批判地理学グループ、リー・ジョアンナ・ワイイン(李慧瑩)、ソロモン・ベンジャミン	鄧永成教授を忘れない ――都市世界を啓発し続ける地理学者―― (注：繁体字中国語版は香港批判地理学グループとリー・ジョアンナ・ワイインの共著であり、英語版と内容が異なります。日本語版は英語版からの翻訳です。)
2	東アジアオルタナティブ地理学地域会議(EARCAG)国際運営委員会	鄧永成教授を偲んで ――友情と協働の25年――
3	ウォン・キッピン（タミー）（王潔萍）、水岡不二雄、リー・チーラップ・ジャッキー（李子立）、ソロモン・ベンジャミン	香港で開催されたEARCAG ――回想録――
4	チェ・ビョンドゥ（崔炳斗）	千の風になって ――東アジアの批判地理学者の使命をウィンシンの知恵とともに続けていく――
5	水内俊雄	21世紀の変わり目にウィンシンと私の間で起こったこと ――EARCAG1999での出会いからその後の魅力溢れる学術企画――
6	シュー・ジンユー（徐進鈺）	脱植民地化と東アジア批判地理学 ――永成さんの実践に基づく学術界の国際分業に関する考察――
7	パク・ベギュン(朴培均)	送友人 ――東アジア批判地理学における鄧永成教授の献身と遺産を偲ぶ――
8	イップ・モーリス(葉鈞頌)、水内俊雄	大阪市立大学に貢献された鄧永成先生の軌跡と関連する著作目録

さん、明治大の大城直樹さん、大阪公立大の福田珠己さんからもいろいろ情報や写真をいただいた。すべて鄧先生の日本の旧友である。そしてCR-ASSISTの四井恵介さん、飯田沙保里さん、寒川万里菜さんには編集を手伝っていただいた。

最後に、そして最も重要なことだが、我々は鄧永成先生に心からの感謝と敬意を表する。我々が何をしようとも、先生の恩恵に報いることは決してできないだろう。

日本は2025年に第11回EARCAG会議を開催する予定であり、東アジアのみならず世界中から批判地理学者を迎えることになる[2]。それは東アジア批判地理学における新たな章となり、鄧永成先生の遺志が私たちとともにあることを信じている。



第 1 回 EARCAG の梗概集
1999 年 1 月 24 日～ 26 日　韓国の慶州と大邱

2　会議の詳細については、下記のEARCAGのウェブサイトをご確認いただきたい。
https://sites.google.com/view/earcag/